

# カエル街の生きものたち 3.

池田 正

池田 正  
いけだ ただし

昨年の「いきものまち  
づくり」に参加した、  
いきものつながりの  
仲間。そして、カエル  
街のオーナー。

「カエル街」。長年、土地に生息していたアズマヒキガエルが、庭に池を造ったことにより毎年、産卵にやってくるようになった。さらに荒川上流に生息していたトウキョウダルマガエルやニホンアマガエルも庭にやってきて、池や水溜りに産卵するようにもなった。庭はまさにカエルの天国に変わりつつある。そこで、庭を「カエル街」と命名しました。

カエル街は、カエルを中心に、小鳥、昆虫、クモ、魚などの動物や、コケ、水草などの植物が、仲良く生活している場所でもある。

ぴよん介なるカエルは50年以上前から庭に住み続けているヒキガエルの子孫です。たえず移り変わる庭の中であって、じつとがまんして生き続けていくヒキガエル全体を表すものであり、池から生まれた9代目になります。

## 「毛虫、つつぽら」

6月の初めの昼頃、玄関のチャイムが鳴った。

「どなたですか。」

「通りがかりのものです。お宅のツバキの葉に毛虫がついているのを見つけたので、お知らせしようと思って。」

「ご親切に。どうもありがとうございます。」

他人のことや、他人の家に起こっていることに我関せずと通りすぎていく今日、なかなか親切な女性がいるものだと感じた。

ところが、さらに声が出た。

「私は小さいときから毛虫が大嫌いなんです。見ただけで体がふるえるんです。はやく殺しておいて下さい。それに、私の可愛い小犬ちゃんに何か起きたら大変だからね。」

自分のいいたいことだけ言っ行ってしまった。

ドアをあけて出ると、小犬を連れられた女性が5〜6mほど先を歩いていった。

玄関脇のカンツバキの葉の1枚に、大きさ1.5cmほどの、茶色い体を、2mmの長さの毛で覆ったチャドクガの幼虫が20数匹、横隊になって行儀よく動きもせず、ぎっしりと集ってい

た。

ことし(平成18年)の6月になってから晴天の日は僅か。雨雲がカエル街の空を蓋い、憂うつな日が続いた。気分が明るくないのは、人間だけではなかった。

小鳥たちも、雨模様の街を好まなくなったようだ。4月には、餌さがしや水浴びにきてカエル街を楽しくさせていたヒヨドリやジュウシマツが、急にやってこなくなっていた。

それでも、ヒヨドリは、2〜3日に1度は姿を見せてくれるが、1羽だけ。かつては暴走族の如くパイパイと啼きながら樹木の間を鬼ごっこするように飛び回っていたのがうそのようである。

この1羽、昼頃思いついたようにカキの木に飛んでくるが、僅か20〜30秒枝に止つて、直ぐに去っていく。

枝にいる間も、何かに脅かされているように、首を左右に振り、きよろきよろして辺りを警戒している。全く落ち着きがない。

カエル街では「我、この街の王者なり。従わざる者、すべて殺すべし。」と、シジュウガラやスズメを追いまわし、ぴよん介仲間のアズマヒキガエルを見つけると、突いて餌にしていたヒヨドリの、あの陰険で殺伐とした目は、どこにもなかった。羽も体も黒っぽい大きな体のヒヨドリが枝にいるだけで、陰気臭く暗く思われる。

同じことが、シジュウガラにとつてもいえる。好ましくない雰囲気であるらしい。

街へくる回数は、ヒヨドリより少ない。4〜5日に1回。いつもこの鳥、2羽以上でやってきて、チイチイと透き通ってかん高い声を響かせ、辺りを明るい気分にしていて。それが1羽でしかやってこず、小さい声しかださない。

そして、人目につかないように低木の小枝にとまり、他人に気づかれないように飛び去っていく。街全体に漂う息苦しさに耐えられない不安に、シジュウガラは、哀しそうな目になっていた。いつも街の中の生きものに活気をもたらしていた元気は、嘘のようになくなっていった。

それでも、1年中ここに住んでいるぴよん介にとっては、この街を忘れず、姿を見せてくれる小鳥たちの訪問で、寂しさによって沈んだ気持ちを、一時でも明るくすることができた。

## ニャドクガ

ところが、チャドクガの発見によって、沈みがちなカエル街は、一気にてんやわんやの大騒ぎ

になった。

これこそ、まさしく晴天の霹靂である。

なにしろ、カエル街は、ここ3年から4年近く、ガの幼虫による樹木や草の葉の大きな被害がなかった。5年程前、近所の屋敷をとり囲む垣根となっていたチャの木も、チャドクガに半数ほどの葉が喰い荒されたことがあった。さらに、このガがカエル街のツバキやサザンカの葉を丸坊主にし、大きな騒ぎになったことがある。

そのときには、殺虫剤を撒布することなく、彼等の習性である明るい日中に集合することを利用して、巢や枝を焼き払った。発生源である垣根のチャの木はすべて取り去ってしまった。以後、カエル街にチャドクガの侵入はなかった。チャドクガに関して心配することもなく、平穏な生活を送ることができていた。

ところが、チャドクガが再び現れたのを知って、ツバキやサザンカの樹木を調べると、驚くなかれ、5本のツバキすべてに幼虫たちがいたのである。天災は忘れた頃にやってくるといわれている。ガの発生は、天災ではないが、自然が、カエル街の生きものたちに、何かを暗示しているように思われた。

この幼虫、なかなかの曲者なのである。彼らは、体に多くの毒毛を持っているのだから、白昼堂々と動きまわればよいのに、それをせず、他の生きものたちが嫌がる暗い夜か、雨天や曇天の日なか、行動を起こす。織田信長の桶狭間の戦術に似ている。奇襲作戦である。

さらに老猪な業を知っているからびっくり。

まだ1cmほどの大きさのときには、葉の表面は硬いので柔かい裏側の部分だけ食べるという芸当をする。表皮が硬くて残されているので、天敵の小鳥はつつかりすると見逃すことが大いにある。また身の危険を感じたら、さっと糸を出し、ぶらりと下に落ちるといって、クモ紛いのこともできる。

この彼らの早業で痛い目にあったことがある。5年前の大発生するとき、彼らの恐さを知らないうで枝をゆさぶった瞬間、上から糸で下りてきた幼虫が、右腕に触れたので払い除けた。しばらくして指と腕が痛くなり、赤い湿疹ができ、1週間以上悩まされたことがあった。

こんな毒蛾を退治するのだから大変である。

上から殺虫剤のマラソン乳剤を噴霧器で撒布すればそれで終わる。だが、カエル街には殺虫剤禁止という規則があるので、撒布はできない。理由は、殺虫剤が街にいる生きものに大きな

影響を及ぼすからだ。

特に樹上生活をしているニホンアマガエル。今を盛りに青春を楽しんでいる彼らにとっては死に追いやられるほどの猛毒。また池の中で相手探しに夢中になっているトウキョウダルマガエル。乳剤が肌に触れたり、吸えばあの世行き。これから成長しようとするクモやカマキリなどにとっても大迷惑。人間たちのご都合で、か弱き生きものを死へ向かわせる殺虫剤は、生きもの天国で使用禁止は当然である。

チャドクガの幼虫退治は、彼らの行動が停止し休んでいる昼、晴天の日を選んで行った。彼らの作戦の逆である。

1本1本のツバキの葉の表と裏を、下の枝から丹念に調べていき、彼らの集まっている葉を1枚1枚切りとり、ビニール袋に入れた。

しかし、それにしても彼らは、いつこんなにも多く発生したのか唖然とした。5年前と同じく5本のツバキに幼虫が群をなし、そのうちの1本は、枝の先端の柔かい芽を食べつくされていた。

絶滅したと思っていたチャドクガが、何故今になって発生したのか、まことに不思議である。調べたところ、チャドクガの生態が少しずつわかってきた。

発生回数2回、冬を樹木の幹・枝で越し、4月頃になると幼虫が数回脱皮。大きくなった幼虫は樹木から下り、落葉などの下でまゆをつくりサナギになる。ふつうは6月頃、成虫になり、そして産卵、また幼虫になり9月頃サナギになり、10月頃成虫になり産卵、そして越冬。

そのことからすると、今カエル街を騒がしている連中は、昨年、樹木に産卵したのが4〜5月に幼虫になったものだろう。

カエル街での4月は、小鳥たちがいつもやってきて、賑やかであった。ところが5月6月は曇天や雨天の日が多く、気温が下がり彼らの姿を見ることが少なくなった。

ヒヨドリやシジュウガラの大好きな樹木はツバキである。少なくとも1度は葉の茂ったこの樹木に立ち寄っている。彼らを魅了するものは何か。それは、タンパク源であるチャドクガの幼虫である。そして他の昆虫と違って、1か所に30〜50匹がころころしていれば、こんなみごとに餌場はないはず。

逆に幼虫にとって小鳥がこなければ、天国である。

それも人間に発見されない限り、夜な夜な枝から枝を、葉から葉を渡り歩き、硬い葉をさく

さくと音を出しながら食べているのだから。

そして、にやりと笑いながら、「余は満足だ。自然の神よ、もっと雨を降らしてくれ。そうすれば、ちっぽけな虫ケラでも生き延びることができるんだから」。

カエル街では思いがけないチャドクガの幼虫の発生を一女性に発見され、いつとき騒然となった。それから直ちに殆どどのツバキを調べ、ガの幼虫の食欲の旺盛さに驚きながら、よっやく彼らを外見上一掃することができたよっである。

というのは、あくまで外見上であって、しぶといこのガ、糸でするりと落ちた幼虫がメス・オス一匹ずつでも生き残ったなら、9月頃に同じような発生をする可能性があるから。

それでもチャドクガの幼虫がいなくなったのだから一安心というところ。大騒動が起きてから1週間ほど過ぎた朝方。「毛虫だ」と知らせてくれた女性が、カエル街の玄関前を通り過ぎていった。子犬は耳の大きいパピオンである。ツバキの前では、憎たらしい目で何かを探るようにはしていた。

それから犬は、隣りの家の塀の前でしゃがみこんで汚物を下から出していた。この女性、まわりをきよるきよる見回し、誰もいないとわかると、何ごともなかったように立ち去っていった。

### 三、**邪悪な祈り**

7月10日を過ぎた頃、気温も上がり30℃前後になった。雲のわれ目から青空が見られる時もあったので、もうそろそろ「梅雨明け」宣言が気象庁から発表される頃だと期待していた。ぴよん介たちは、この梅雨明けを一番楽しみにしているのである。

というのは、7月から8月にかけて、トンボやセミ、そしてトウキョウダルマガエルが、カエル街の中で思う存分に動きまわり、みなを笑わせたり悲しませたりして楽しませてくれるものだから。

ところが期待は完全に外れてしまった。

日本列島の西から東に横断していた梅雨前線は、この列島を余程愛しているのか、なかなか北上せず、居座ってしまった。長期滞在である。それだけなら、やがて時期がくれば、前線は動いてくれるだろう。「待てば海路の日和あり。」といわれているから、あとにくるすばいじい

夏をのんびり待とうということになるのである。

「長期滞在もまた良きなり」といいたいところだが、この前線に思いがけない代物が加わったから、大変だ。

毎年この時期になると、赤道付近で台風が発生する。この怪物、全く気分屋である。僅かな条件で、進路を、北西・北・北東へと、自由に変更もするし、ジグザグに進み、ときには止ったりする。

お化けの台風4号が発生したが、進路を北西にとり、日本列島を縦断しないことがわかったので、安心していた。ところが中国大陸で温帯低気圧になったとき、「湿舌」というお土産を東の方に贈ってくれたから事が大きくなった。

この「湿舌」。湿った暖かい気流の領域のことだが、これが舌のように細く長く東へ伸びてきた。それも長期滞在中の梅雨前線の下であったから大変である。

雨量は、普通の何十倍にもなった。

長雨と豪雨。「地球上で我こそは主なり」と言い続けてきた人間だが、パソコン、携帯電話、テレビなどは、この雨で無残な姿になってしまった。人間が追い求めてきた文明の利器は洪水・山崩れ・土砂崩れなどの前に、一瞬にして用をなさなくなってしまったのである。自然の神が、自然を征服しようとする人間の傲慢さをちくりと一針さしたように思える。

カエル街でも、3日間の雨量は、水槽の深さで23cm。即ち230mm。池の水は増し、外に溢れ、メダカがパシャパシャはねていた。

まことに人さわがせな梅雨前線である。しかし、考え方を変えると、この時期になると嫌らしさをあちこちに起こす前線は、地球上の一種の「やまい」というところである。

ところが梅雨空を仰ぎ見て、「もっと降り、もっと降り。アメよ。」と、人間にとっては邪悪ともいえる祈りを捧げている連中がいることがわかってきたのである。

いってみれば人間の敵である。

雨が降らないときには、「ゲロ・ゲロ」「ゲロ・ゲロ・ゲロ」と樹木の上にいる生きものが、啼きだすのである。そうすると殆んど80%〜90%ちかくの確率で1〜2時間後には雨が降りだすから不思議である。この生きものは、我がカエル街のアイドルといつべきアマガエルである。

発情期に啼いていた、美しく、情熱的な声の演奏ではない。どことなく自棄やけっぱちで、駄駄を捏ねる子供のようには聞えてくる。

1匹が啼きだすと、また1匹が啼く。最後にはお互い声をからしている。絶叫にちかい。それは5〜6秒の短い叫びである。

自然の神は、この叫びを確実に受けとめ、望み通りの雨を降らせていると思える。

5月に誕生したアマガエルの子は、体長1cmになり、池近くの草の葉にしがみつきながら成長していた。ぴよん介はいった。

「カエル、カエルと馬鹿にするんじゃない。カエルは、人類より歴史が長いんだ。水陸両用の両生類ということ人間は忘れてる。特にアマガエルは、自然と阿吽の関係にあるんだ。梅雨は花粉と同じ。この病気がさらに蔓延したら大変なことになる。湿舌は、梅雨にとって合併症の1つ。はやめに2次・3次災害を起こさない対策を人間はとっておいたほうがよいと思うよ。」

いろいろな問題が起きたら原点にカエルことが大切。

もう一度、アマガエルの祈りを静かに聞いて、地球の安泰を祈願したらよいのでは。」

『ゲロ・ゲロ・クワツ・クワツ』……

#### 四、侵入者ナガコガネグモ

「お見事。すごい。こんなことってあるのだろうか。」ぴよん介は叫んだ。

8月中旬の朝、カエル街の片隅に茂っているフジとイロハモミジの幹の下に張られている、円形のクモの巣を見て発せられた感嘆の言葉である。巣の主人は、ナガコガネグモのメスである。

カエル街の原住民といわれ、空間に円形の巣を張って威力を他の生きものに示しているのはジョロウグモやオニグモの類である。

ナガコガネグモなど見たことがなかった。それがちよつとしたことから、この街に入ってきたのである。

7月の中旬、長瀬へ野草観察だという名目で遊びに行ったときのことである。野草の中に「オロギの仲間がいたので採取し、空のペットボトルに入れた。一緒にそこにあった草も入れてきた。帰ってフジの木の下で「オロギをボトルから取りだしたとき、小さなクモがいたが、そ

れほど気にはしなかった。というのは、このクモは、カエル街に住んでいる類と同じだろうと思っただから。

ところが2日後、地上から30〜40cmの高さのフジとモミジの間にあまり大きくない円形の巣が垂直に作ってあった。そして、その中心に、ボトルにいたクモが下向きに鎮座していたのである。

8月の初旬になって、巣の中心から上下に白い糸で作られたジグザグの帯(かくれ帯)があることに気づいた。このクモは、腹の縞模様などからジョロウグモでなくナガコガネグモであることを知った。この街で初めてみる新人である。

10日に脱皮した。腹部はまるまると太り、大きさは2cmほどになっていた。これが最後の脱皮ならば、成虫になったということであり、やがてオスも密かに近寄ってくるはずである。

ジョロウグモの巣は地上1〜2mの高さにあるのに比べ、このクモは低く巣を張るので、獲物になるのは草の中を動きまわる昆虫が多い。特に、シウリヨウバッタが、いつも餌になっている。

バッタが巣にかかるのとパツととびでてきて、尻にある糸いぼから4本の糸で、獲物を肢でころころ回し、がんじがらめにしてしまう。それから直ぐには食べず、縦糸にくくり宙づりにしておく。見せしめしているのか、あるいは自分が偉大な力の持ち主であることを誇示しているのか。時間が過ぎてから捕獲したバッタをくわえてかくれ帯の後にいき、ゆっくりと食べていた。

8月26日のことである。このナガコガネグモの大捕物があり、近くに住み家を持つぴよん介は、その一部始終を見ていた。

午前11時頃、アブラゼミの幼虫が、クモの巣近くに生えているヤマユリの茎を40cmほど上り、葉の裏で脱皮した。陽は上り、ゼミの白っぽい羽も茶色になり、飛び立つ力もできたと感じたのか、葉から離れた。初めて空に向かうゼミだから飛行力が弱かった。そこへ運悪く目の前にナガコガネグモの巣があったのである。ゼミはまともに、中心から20cmほどの横糸に引っかかった。オスゼミだったので、ジイジイ噴きながら羽をばたつかせた。

その時にはもうクモがきていた。バッタのように捕食者が被食者より大きい場合には、肢で相手くるくる回して、糸で縛ることはできるが、それも自分より2倍もの大きさのゼミには通用しない。回らないばかりか、羽をばたばたするので、粘りけのある横糸は破れた。それだ

けではなかった。巣の中では絶対的な強さを持ち、するどい牙で相手を刺す女王さまは、前羽で飛ばされてしまったのである。ぱしつと音がしたのでこれで負けとばかり、巣の下にある草の葉に落ちてへばりついた。巣の1／3は破れていた。

セミは、勝ったのだから巣から離れ飛び去ることができると思っていたら、そうではなかった。縦糸の1本にぶら下っていた。

そして、前羽1枚の先端には10数本の糸が付着し、それらの糸が振れて他の縦糸にくっついていった。

セミは一生懸命に羽や体をばたつかせていたが、前羽に付いた糸を切ることができなかった。あとはセミの体力が弱るのを待つだけ。女王さまもエネルギーをつかikitったのか、しばらくは動くことしなかった。

多分、意識をとり戻して起き上っても、再び元の巣に戻ることはないだろうと思われた。だが、さに非ず。1.5mほど離れた葉に着陸したときにも命綱はしっかりと尻についていて、セミが空中にいる僅かの時間にも、どんどん伸ばされていった。1時間ほど過ぎて、女王さまはゆつくりと立ち上がり、糸をたぐるようにして下向きになったまま、破れた巣のかくれ帯に帰った。セミは、ぶら下がったまま、動きが鈍くなってきた。女王さまが獲物に決戦を挑んだ瞬間、上あごから毒をさしこんでいたのだが、その作用がじよじよに効果を及ぼしてきたらしい。

やがて女王さま、セミのぶら下っている縦糸に下りて、がぶりと胸と腹の間にかみつき、4本の後肢で抱えこんで、巣の中心に持ちこんだ。

よく見ると、セミの4枚の羽と6本の肢は、動くことができないように糸で巻かれていた。巖流島では、舟で乗り込んできた宮本武蔵が島で待つ佐々木巖流に勝ったが、カエル街のクモの巣での決戦は逆であった。セミの死に物狂いの抵抗は、待っていたクモの一刺で無駄に終わったのである。

女王さまがセミを口から離れた翌日の午後2時。セミがこれから青春を楽しもうと旅立つてから死ぬまで僅か27時間。6年あまり暗い地中にいて、これから明るい地上にでて彼女を求めていこうとするときに出会った不運。1枚の羽が糸から離れず、羽をばたつかせながら、セミは、何を考えていただろう。

女王さまは、いままでの出来ごとを忘れたかのように、巣作りに励んでいた。2時間以上かかった。でき上ったのは夕方である。

巢のできばえをみた。びよん介が叫んだのが、冒頭の言葉だったのである。知らぬ土地へ、ペットボトルによって運ばれてやってきた1匹のナガコガネグモのたくましく生き方に、さらに「まいりました、女王さま」と一言。

返事は、「こんなことはあさめしまえよ」。